

氏名(本籍)	たか 高	はし 橋	さとし 敏	(静岡県)		
学位の種類	文学博士					
学位記番号	博乙第637号					
学位授与年月日	平成2年12月31日					
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当					
審査研究科	歴史・人類学研究科					
学位論文題目	近世村落生活文化史序説 ——上野国原之郷村の研究——					
主査	筑波大学教授	文学博士	大濱	徹也		
副査	筑波大学教授	文学博士	田中	圭一		
副査	筑波大学教授	文学博士	熊倉	功夫		
副査	筑波大学助教授		武田	正		
副査	筑波大学教授	理学博士	山本	正三		

論文の要旨

本論文は、主として近世、17世紀後半から19世紀中頃、元禄から慶応にかけての上野国原之郷村（現群馬県勢多郡富士見村原之郷）を舞台となし、村の生業と生活文化の多様な展開を、とくに船津伝次平家の経営と生活を中心に位置づけることで検討したもので、序章と7章30節にあとがきからなる作品である。本研究は、旧来の「関東農村荒廃論」を批判し、農家経営の自立をめざして養蚕・生糸業にかかわり、文字文化を学習し、その知識をもって農業経営の安定をはかり、豊かな村をきずかんとした農民の生活と文化の営みを、明らかとなし、日本の近代化の底流にかかる民衆の自立的営為があったことを一地域における具体的個別像をとおして描かんとしたものである。

序章「近世村落生活文化史研究の現状と課題」は、旧来の研究史の批判的検討をふまえ、小農家族の生産と消費の構造をふまえた文化的営為を解明することにより、新しい近世農村像を提示しようとする志をのべたものである。

第1章「関東農村の荒廃と農民倫理の形成——上野国赤城西南麓村々の生活と文化——」は、18世紀末から19世紀にかけて、原之郷村においても戸口の減少、断絶・不斗出者の激増をはじめとする「荒廃」現象が顕在化してくるなかで、高い田方年貢を回避して畑方の養蚕・生糸業による農家経営の自立がはかられ、「余力学文」にもとづく文化創造への主体的意欲にみちた経営精神が生み出され、「民富」の形成がはかられようとしていることを素描したものである。

第2章「村落文化の社会的基盤——近世村落原之郷の生活史——」は、原之郷村の自然環境と支配関係がもたらす用水問題をふまえ、船津家の農業経営の分析をとおして、畑作と養蚕・生糸業が展開

していくなかで、読み書き算用を身につけた民衆が強き自己主張をするまでになっていく姿を「家督」に執念をもやす「我意申」す女として紹介するなど、村に住む人間の生活と行動を具体的にあとづけている。

第3章「近世村落における子どもの存在状況」は、小農家族における子どもが家族のなかに位置づけられたとなし、産育・教育をめぐる儀礼や習俗が成立し、手習い塾をとおして「文字文化」が村落社会に定着していく様子を具体的に問うたものである。

第4章「近世小農の消費生活と教育・文化の創造」は、船津家が小農としての自律的経営を確立してきた背景をふまえた上で、「家財歳時記」の分析によって、横浜開港がもたらした養蚕・生糸業の盛行にささえられた消費構造を分析し、衣食住のみならず付き合いや旅のことに説きおよび、書籍等の購入状況を解明することで「文字文化」の創造に積極的にかかわり、手習い塾を経営することで村の向上をはかろうとした様子を分析したものである。

第5章「近世村落と手習塾——手習塾九十九庵の実証的研究——」は、船津伝次平父子が経営した九十九庵について、「弟子記」等の記録を分析することで、筆子の階層、学習の実態を具体的に明らかにしたものである。そこでは、筆子に応じて生活に根ざした教材を作成していることなどを紹介し、手習い塾が生きていく上での知識を授ける場であったこと、筆子が「筆子中」として結社をつくって村落社会の文化創造の主体勢力となっていったことを具体的に論じたものである。

第6章「地方文人と文化結社」は、上小出村の藍沢無満とその文化結社蓼園社の教育と教え子の存在形態を明らかとなし、手習い教科書「上小出村往来」が村を理解するための教材であることなどを指摘した上で、俳諧に表出された心意をてがかりに、「百姓文人」の生活と感性をさぐり、その経験主義が農業経営にも生かされており、生産者農民としての場を築いていったことにまで言及している。

第7章「近世村落と農民剣術——在村剣術の虚と実——」は、原之郷村と箱田村に伝承された「源流」と「法神流」の紹介をとおし、村における「武」の伝承を検討すべく、在村剣術の動向を考察したもので、国定忠治に代表される関東通り者や無宿人のありかたをふまえ、幕末の農兵が権力に取り込まれた存在となったことを指摘している。

あとがきは、以上7章で解明した原之郷村を中心とする村落の生活文化の創造力の豊かさについて摘記し、研究が意味するところに言及したものである。

審 査 の 要 旨

本論文は、赤城山麓の一農村、群馬県勢多郡原之郷村を中心に、主として18世紀後半から19世紀にかけての村落の生活文化の実態を個別具体的に解明しようとしたものである。

本研究は、1)「関東農村荒廃論」として説かれる近世史の通念を批判し、一村の個別史を徹底的に分析することで、畑作養蚕地帯における農民生活の具体相を解明し、「荒廃」を克服する過程で「文字文化」を身につけ、農家経営の自立がはかられていったこと、2) 船津家の経営と日常生活を分析し、農民が「文字文化」を獲得していく姿を明らかにしたこと、3) 子どもが小農家族の一員として位置づ

けられ、子どもの文化と生活が形成されたこと、4)「百姓文人」といわれた村落指導者は、生産者農民として、手習い塾を経営して農村の生活文化を支え、村の主体勢力となってくる「文字文化」を身につけた「筆子中」につらなる多くの農民を育成したこと、5) 農村剣術の潮流に光をあてて「武」の系譜を位置づけたこと等、近世の農民生活の具体相を多面的に描きだしたものとした評価ができる。その特色は、一地域の徹底的な資料探索をふまえた分析をなし、近世中期から幕末にかけての農村生活の諸相を、農民の自立への志とかかわらせて問うなかで、手習い塾や子どものありかたのみならず、消費構造の時代的特質にまでふみこんで解明するなど、個別具体的な「村落生活文化」の歴史像を提示したことにある。

しかし、論文の全体像は、個別的な具体像がもつ豊かさを十分に生かしきれておらず、第7章の座りが悪いなど、素材がかたる実証の面白さと結論の間にやや飛躍がみられ、「近世村落生活文化」が生み出した固有なる世界をいまだ説得的に明示するまでにいたっていないことが惜しまれるところである。

以上のような問題点があるとはいえ、近世農村における生活文化の諸相を具体的事例をふまえて解明し、時代を生きた農民の哀歓とかかわらせ、上野国原之郷村と船津家をめぐる人々の生活実態を描きだそうとした作品であり、旧来の近世農村史が説きえなかった世界を提示したものとして高く評価できる。

よって、著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。